

前回の振り返り（各委員から出た意見）

（1）子どもの居場所に関する講義、子どもの居場所に関する審議

- 中野区においても、公園は利用ルールがあり、自由に過ごせる場所ではないのではないか、また、学校の校庭なども自由に過ごせないなど、自由に過ごせる場所がなく、家の中で過ごしている子が多い現状があるのではないかと。
- 共働き家庭の子どもなど、なんとなく居場所がないと思いながら過ごしている子どもがいるのではないかと感じることもある。
- 子どもが、自分の意見が反映される経験をすること、自分が言った意見に対してフィードバックがあることは重要である。
- 居場所といったときには、学校外のことだけでなく、子どもが多くの時間を過ごす学校についても考える必要がある。

（2）第4回委員会を受けて委員の皆さまからいただいた追加意見

小学校高学年から中高生のための居場所の必要性について

子どもから大人まで、それぞれにとっての「居場所」としてまず思い浮かぶのは、家庭や学校、職場です。しかし、それ以外にも趣味や活動を通じた場所が「居場所」となり得ます。

特に小学生低学年までは、大人とともに安心して過ごせる場が必要であり、中野区の学童施設もその考えに基づいて設置されていると思います。また、成人した大人は、自らの責任のもとで自由に行く場所を選択することができます。

しかし、小学校高学年から中高生にかけては、そのどちらにも属さない世代であり、居場所の不足が見えにくくなっているのが現状だと思います。

小学生低学年までの子どもの居場所については、保護者がその必要性を実感し、声を上げることができます。しかし、小学校高学年から中高生にとっては、自分が生きている地域や社会をそのまま受け入れるしかなく、居場所の不足を訴えることが難しい背景もあり、光が当たりにくい課題だったのではないのでしょうか。（それ以外の子ども関係の行政課題の優先度として、例えば待機児童問題や産後ケアの必要性の陰に隠れていた側面もあると思います）

私自身、中学3年生と小学6年生の子どもを持つ親になって、友達と安心・安全に、そして無料で遊べる場所がほとんどないことを痛感しました。児童館は低年齢向けの印象が強く、かつてのように気軽に友人の家に集まれる時代でもありません。また、家以外の場所に行きたいと考えても、その場限りのイベントでは継続的な交流の場とはなりにくいのが現状です。

現状、中高生が外で集まるためには、カフェやカラオケ、スタジオ、テーマパークなど、いずれも費用がかかる場所を選ばざるを得ません。しかし、これらは本来の意味での「居場所」にはなり得ず、安心して過ごせる場とは言い難いものです。実際には、友達と遊びたくても、経済的な理由で一緒に行動できない子どもも多いと考えられます。

先日の子どもの権利委員会の講演会で先生から伺った話によれば、小学校高学年から中高生は、社会において「どちらつかず」の存在として時に邪魔者扱いされてしまうことの事例が紹介されました。中野区でも決して他人ごとではないシーンばかりだと思います。子どもたちが社会の一員として、自立に向けて社会に参画していく年代であるはずのこの時期に、社会の一員として地域に居場所がない、認められない疎外感を持つことは、非常に大きな問題です。地域社会に関心や愛着を持つ機会が不足していることで、例えば投票の意味を感じられない若者の低投票率の現状にもつながる背景かもしれません。

中野区では近年子ども関係に力を入れ、様々な施策を検討してくださっていると感じますが、今まで最も手付かずだったのが、この年代の課題対応だと思います。私立中学校に通う子も多くいる中野区において、行政が公立学校以外の中高生の居場所に力を入れることは、広く中高生年代の子どもたち全体に対する支援につながります。いまの日本は、過去に例のない少子化社会の渦中にあり、分け隔てなく子どもたちが自らの生きる力をはぐくんでいくことは、必ずより良い世の中を形作っていくことにもつながるはずです。中高生の居場所に反対する方がもしいるとしたら、そのように広い視野で反論したいと思います。

過去中野区には U18 という中高生もターゲットにした児童館がありましたが、必ずしも中高生年代の利用率が高くはなかったと聞いたことがあります。児童館職員の方々は、学ばれてきたご経験や背景から、児童年代に対するスキルはあったと思いますが、中高生に対するスキルは決して高いとはいえなかったのではないのでしょうか。その時の反省を活かし、これからは経験のある民間の経験値を活かし、また区の職員の研修も行い、なにより中高生年代の当事者たちと共に試行錯誤しながら新しい居場所を作ることを期待します。

先日まで中野区が中高生世代に居場所アンケートを取っていたのはとても心強いと感じています。どのような結果が出てくるのか大変興味があります。

また、過去の中野区のハイティーン会議で、まだ投票権のない中高生年代の子どもたちか

ら、何度も何度も居場所の必要性が訴えられていることを行政も議会もしっかり受け止めて、その声に対してフィードバックをしなくてはいけないと思います。居場所ができた際には、声を上げてくれていたハイティーン会議参加者をぜひ招待して開所式なども開いてほしいと思います。

子ども達は1年1年成長していきます。中高生世代の居場の必要性を長男が高学年の頃に感じてから、もうすでに数年たってしまいました。この春長男は高校生になってしまいます。

待っている時間はありません。状況を改善するために、大人の責任として、様々な趣味や価値観を持つ中高生が、学校や部活動といった大人主導の枠組みではない、自らの好みに応じて選べる参画できる自由な居場所を作ることが必要です。

中野区には課題を重く受け止め、小学校高学年から中高生が安心して集い、経済的な負担なく過ごせる居場所の整備を進めて欲しいと強く願います。

子どもたちにとって、いつでも無料で立ち入れる安全な場所が必要。それを実現している方がいらっしゃいますので、情報共有としてご紹介します。

都会での子育てに孤独を感じた末岡さん。私が末岡さんを知ったきっかけは「恵比寿じもと食堂」です。これは、私が2019年に書いた記事です。

ライターとして、ピヨピヨの頃、末岡さんに取材を申込みました。

<https://genki-mama.com/articles/082tv>

その後、あきる野市との二拠点生活を経て、あきる野市にお引越しされ、「100日荘」という子どもや地域の方々の居場所をつくられました。

<https://www.tokyo-np.co.jp/article/302075>

<https://www.facebook.com/profile.php?id=100095220824188>

もし、講義などをいただける機会があったら…こども食堂やこどもの居場所を提供しているリアルな方として、目の当たりにしていることなどを聞くことも、とても参考になるかなと感じました。

◇「子どもの居場所に関するデータ集」からの分析と考察

○友だち関係…同年代の関りが健全であることが分かる。

- ・一番仲の良い友だちは（学校の）…小 80.3%中 79.3%
- ・一緒にたくさん遊んでいる（とても、そう思う）…小 85.2%中 79.3%

○家族の時間の課題…子どものための両親の働き方改革、考え方改革が重要。家庭が一番の居場所は普遍。

- ・平日の放課後誰と過ごすことが多いか（家族）…小 43.7%中 37.9%(両親外国籍 46%)
- ・平日の放課後はどこ。自分の家（毎日と週 3, 4）…小 69.7%中 66.8%(部活動 48.9%)

＊中学生の事例 4：中学生の居場所は、学校、部活、塾、習い事。それ以外の場所は？

◆居場所が必要な根拠

○ほっとできる場所・・・自分の家…小 73.3%（ない 3.1%） 中 78.9%(ない 3.0%)

○居場所の利用意向（中学生、使ってみたいと興味あるの合計）…ニーズは高い。

- ①平日放課後夜までいることができる場所 48.6% ②休日にいることができる場所 51.1%
- ③家で勉強できないとき静かに勉強できる場所 58.8%
- ④大学生のボランティアが勉強を見てくれる場所 45.2%
- ・中高生のための居場所となる施設が欲しいと思うか(とても＋そう思う)…58.3%(親 57.0%)
- ・「中高生のための居場所」に期待すること
- 1…友だちと遊べる約 70% 2…自習できる約 52% 3…一人で時間をつぶせる約 50%

◆現在の私の考え

- ・対象者は、中・高校生に絞る。
- ・次の①②③ができる空間を確保するとよいのではないかと。①平日に何となく一人でもいられる場所。

②友だちと過ごせる場所。③静かに自習できる場所。

・中・高校生の複雑な心を休める場所、部活だけの関わりでないところを意図的につくる。時々人と関わって何かをする。（イベントでもモノづくりでも）そして、気兼ねなく集中して勉強ができる場所にすることが、求められているのではないかと。「足立ベース」の責任者の方の講演会から多くのことを学んだ。

「足立ベース」は貧困対策であったが、複合的な「居場所」としてのスペースとしても手本になる。萩原先生の講演キーワード、物理的な空間と仲間と時間を大切にできる「居場所」で、「足立ベース」キーワードより加減な大人の支援が肝要となると考える。

1. 『目的なくいられる居場所の必要性』について

あいまいさ、余白、隙間など、少し具体的なニュアンスを伝えたいと思う。

また、子どもたちが多くの時間を過ごす場所である学校は、本来であれば『こうあるべき場所』だということも認識はしているが、現代の子どもたちの個々の成長や家庭環境等を考え、学校生活にも、あいまいさ、余白、隙間を取り入れる必要もあるのではと考える。

2. 『居場所のルールづくり』について

委員会でもご意見があったように、多世代を巻き込むことが大変重要と考える。そのためには、いかに、『今の子どもたち』を知ってもらうか。また、『今の親や家庭』、『今の学校』、『今の先生たち』を知ってもらうかが大変重要だと思う。居場所を作る前に、様々な方法を用いて知る機会を作っていく。近道の一つとして、地域の学校に、地域の皆さんが訪れる、接することができる、敷居の低い地域の学校を目指して欲しいと願う。セキュリティなど多くの不安要素はあるが、いよいよ、中野区でもコミュニティスクールが正式稼働するこのタイミングをチャンスと捉えて取り組む必要があると考える。

コロナ禍以降、コミュニケーションや、人との距離の取り方、そのほか様々な価値観が大きく変化しました。また、核家族やひとり親世帯の増加、また働き方の多様化などにより、親自身も社会から孤立してしまい余裕のない状況があると感じます。子どもを取り巻く環境も、大人同様、大きく変化しており、様々な場面で効率化、合理化が求められ、人とのつながりや、余裕を失っているようにも感じます。

このような状況下において、子どもが（気軽に）立ち寄れる、自分自身のやりたいことができる多種多様な子どもの居場所が身近な地域にあることは、子どもや親の安心、安全につながると考えています。自分を受け入れてくれる信頼できる大人がいる、自分の役割がある、楽しい、ほっとできる・のんびりできる、自分の話を聞いてもらえる、困ったことや悩み事を話せる等、子どもの成長、子どもの権利の保障という視点からも重要かつ必要であると考えます。